



## 字引き

久保 謙哉

*Kubo Kenya*

職場の机の二番目の抽斗に、ポリ袋に入れた辞書が入っている。非密封 RI でもあるまいし、なにゆえに辞書をポリ袋に入れているかという、散逸させないためである（これは RI と同じ）。辞書が散逸するとは変な話だが、実際このポリ袋に入っている辞書はパーツに分かれていて、もともと青いビニール装の辞書が、本体と本体から剥離した表紙、中表紙等全部で 8 点である。本体の 1 枚目はインディアンペーパーの「英米発音およびつづり字」が剥き出しになり、それに続く 2 枚目は、もうさっそくアルファベットの A の見出しが始まる。実質だけを残し、無駄を排した体脂肪率ゼロの体に見えないこともない。歴史的に最初に脱落した背表紙も保存していたはずだがいつの間にか逃散し、現存本体 573 葉を束ねる綴糸はトウモロコシのヒゲのようにもじゃっている。袋に入れて抽斗にしまっている使いもしない辞書なのだから、捨てればいいものを、自宅に置かず職場に後生大事に取っているのは、モノを捨てられない貧乏性の故でもあり、またこの辞書が十代の頃からの多くの思い出の塊である故でもある。

既にお気づきのようにこの辞書は英語の辞書で、奥付に三省堂編集所編「コンサイス英英辞典」（改訂版）昭和 44 年 1 月 20 日改訂 14 版発行 定価 750 円とある。「英英辞典」の思い出でコーヒーブレイクとは、インテリ自慢の高慢ちきと思われる向きもおありかもしれないが、まだここであせっちゃいけません。パーツその 4 「改訂版の序」第 5 段落には、「英語による説明のあとに与えた和訳語も今回の改定では、相当に増した。英語による説明で語義・ニュアンスをつかんだうえで、さらに和訳語によりいっそうの安心感が得られよう。」とある。つまり「英英辞典」の皮を被りながら、実は「英英和

辞典」とも呼ぶべき 1 粒で 2 度おいしいバイリンガル（？）英語辞書なのである。例えば「**isotope** [áisetoup] *n.* 【化】 one of two or more forms of an element differing from each other 同位元素. [Gk *topos* place]」, というような具合である。

この辞書の来歴は、はっきりしない。英語を初めて習った 45 年前の中学の教科書には、巻末に和訳付きの単語一覧があり、辞書無しでも普通の勉強には困らなかった。しかし中学 3 年で高校受験期になると、入試問題には教科書に無い単語が過去問には出てきて辞書が必要になる。そのころたまたま父の書棚の隙間に無造作に突っ込まれていたこの辞書を見つけ、自分のものにして使い始めたようだ。なぜこんな辞書が家にあったのかは判然としませんが、英文学者の叔母が置いていったとも聞く。

いきさつはともかく高校から大学、大学院、更にその後、40 代前半までずっとこの辞書を使っていた。当然ながら辞書を引く時の心意気は常に変わらず「英語に没入した状態で、英語で英単語の意味を理解する」だが、見出し単語が見つかった瞬間に、ベクトルは反対向きの 511 keV 放射線となって日本語母語話者の本性にたちもどる。英語による説明は視界から去り、「和訳語により語義・ニュアンスをつかん」で終わり。普通のモノリンガル（？）の「英和辞典」としてこの辞書を愛用していた。英語が進歩しないわけである。2 年間住んでいたカリフォルニア州アーヴァインも、3% が日本人で、日常生活でも英語より日本語となれば、結果は推して知るべし。英語を勉強しに行ったわけではないと慰めつつ。

30 年という使用年数を考えるとこの字引き（昔は辞書をこう呼んだ）を数十万回は引いたはずである。自分自身の体を除くと、筆者と一緒に過ごした時間、移動距離においては共に最長だと思う。生をもたざる物体ならば、崩壊せざるべからずとはむべなるかな。いまや今生の別れとて手厚く葬るべきか。先日都心の大規模書店で探したところ、セミバイリンガル（？）を謳う辞書が 1 つだけあったが、収録語数は 4 分の 3、英語辞書なのに語源もない。これでは売れないだろう。「コンサイス英英」は復活しないだろうか。老眼の筆者には、宝の持ち腐れになるが。

（国際基督教大学）